

「第三十回庭野平和賞」贈呈式 名誉総裁ご挨拶（最終）

本日は、「第三十回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、文部

科学事務次官・森口泰孝様、もりぐちやすたか駐日ノルウェー大使・アルネ・

ロイ・ヨルター閣下、日本宗教連盟理事長・芳村正徳様よしむらまさのりをはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、ノルウェー国教会名誉監督のグナール・スタルセット師にお贈りできますことは、当財団にとりまして大変光栄なことであります。

今回の庭野平和賞は、第三十回という節目にあたります。一九八三年、ブラジルのヘルダー・ペソア・カマラ大司教に「第一回庭野平和賞」を贈呈して以来、回を重ねるごとに国際的な評価も高まり、「日本の平和賞」「宗教の平和賞」として広く知られるようになってまいりました。

二〇〇三年からは、世界各国の十人の宗教者で構成される「庭野平和賞委員会」が設けられ、より幅広い見地から受賞者の選考が行われております。これまで庭野平和賞を支えてくださった「庭野平和賞委員会」の諸先生、また関係者の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。

只今私は、「庭野平和賞委員会」についてふれましたが、今回の受賞者であるスタルセット師は、二〇〇四年から二〇一〇年まで、その委員会の委員長を務めてくださった方であ

ります。いわば、これまでは「選ぶ立場」におられたのです。

実を申しますと、「庭野平和賞委員会」では、受賞者の候補として、スタルセット師のお名前が何度も上がっておりました。しかし、スタルセット師が「庭野平和賞委員会」の委員長を務められていたことから、贈呈の時期が遅れてしまったという経緯がございます。（同師は二〇一〇年、委員を退任。）

そして本日、ようやくスタルセット師に庭野平和賞をお贈りすることができます。第三十回という節目を迎えた庭野平和賞を、スタルセット師という最も相応しい方にお贈りできますことは、何よりの喜びであります。

スタルセット師の活動につきましては、先ほどもご紹介がございました。皆さまもお気づきのように、その活動は、大変多岐にわたります。

スタルセット師は、ルーテル世界連盟、世界教会協議会の中心メンバーとして、すべてのキリスト教の一致を目指したエキュメニカル運動を推進してこられました。同時に、世界宗教者平和会議（WCRP）、欧州諸宗教指導者評議会（ECRL）のリーダーとして、諸宗教間の対話・協力にも尽力されています。

ノルウェーでは、議員として国政の場でも活躍されたほか、ノーベル平和賞の選考委員も務められています。

また国際的には、イラク、スリランカ、ナミビア、グアテマラなど世界各地で、諸宗教間対話、紛争和解、平和構築に取り組んでこられました。とりわけ二〇〇六年から二〇一〇年までは、ノルウェーの政府特使として、東ティモールの和平調停という重責を担われています。

さらに国連の場でも、H I V / エイズの解決をはじめ、核軍縮、国連ミレニアム開発目標の推進などに取り組んでおられます。

本日は、ご紹介しきれませんが、このほかにも、宗教、政治、社会、文化など多様な分野でご活躍されています。

庭野平和賞は、三十回を数えますが、これほど幅広い活動をされてきた受賞者は、他に例がないのではないかと思います。

私は、W C R P の会合、庭野平和賞委員会などを通し、長年にわたってスタルセット師とご縁を頂いてきました。そして、スタルセット師が、「仲介者」「調停者」と申しますか、いわゆる「まとめ役」として傑出した能力を持っておられることを肌身で感じてまいりました。

寛容の精神で、誰の意見も公平に聞くこと。決して冷静さを失わないこと。偏ることなく、皆が納得できる結論に導いていくこと。これらを穏やかな表情で、ごく自然になし遂げるのが、スタルセット師であります。

こうしたお人柄が、世界の人々から信頼され、困難な状況であればあるほど、スタルセット師の存在が必要とされてきたのでありましょう。

以前、本会の機関紙に、スタルセット師のインタビュー記事が掲載されたことがあります。その中で、スタルセット師は、次のように述べておられます。

『キリスト教に「大いなる戒め」という教えがあります。「主なる神を愛しなさい」「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」という教えです。聖なるものを敬愛し、友

なる人間を愛し、そして、自分自身への尊厳を失わない——こうした教えは、あらゆる宗教に通じるのではないでしょうか。ここで大切なことは、神への愛は、隣人への愛、さらに自己の尊厳と不可分であることです。ただ単に「神を愛さなくてはならない」ことだけを重視すれば、狂信主義や教条主義に陥ってしまいかねません。神への愛とは、隣人である他者への愛によって常に試され、裏付けられるべきものです。また、自己の尊厳とは、自分自身に与えられた役割を真剣に考えていくことを意味します。「私には変化をもたらず力が備わっている」と自覚すること、それらが「大いなる戒め」に込められた意味だと思います』と。

スタルセット師のお人柄、そして多岐にわたる活動は、こうした宗教的信念に裏づけられているのでありましょう。

またスタルセット師は、『すべての宗教者は、本物の宗教、真理とは何かを問い直し、まず自己批判しなければなりません』と語っておられます。

宗教者は、自らの信仰に忠実であればあるほど、他に不寛容となる——そうした誤った見方もございます。しかし、本当に信仰を突き詰めていくならば、やがては、すべてに通じる真理に行き着くのであります。

「第二十二回庭野平和賞」受賞者のハンス・キュング博士は、そのエッセンスを「グローバル・エシック（地球倫理）」という形にまとめ、提言されました。

普遍の真理を見極め、共有することは、争いのない、平和な社会、世界を築く上で不可欠の要素です。スタルセット師がおっしゃるように、宗教者自身が内省し、宗教の我、宗派の我を超えていくことが、出発点であることを肝に銘じたい

ものであります。

スタルセット師は、日頃、アッシジの聖フランシスコの「平和の祈り」を捧げておられると伺っています。平和と清貧に生きた聖フランシスコの祈りは、宗教の相違を超えて、心に響く内容です。

皆さまもご承知のことと存じますが、その祈りは、次のようなものです。

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。  
憎しみのあるところに愛を、  
いさかいのあるところに許しを、  
分裂のあるところに一致を、  
疑いのあるところに信仰を、  
誤っているところに真理を、  
絶望のあるところに希望を、  
闇のあるところに光を、  
悲しみのあるところに喜びを、もたらすものとしてください。  
い。

慰められるよりは慰めることを、  
理解されるよりは理解することを、  
愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。  
わたしたちは、与えるから受け、許すから許され、  
自分を捨てて死に、永遠のいのちをいただくのですから。

この「平和の祈り」の中に、スタルセット師の平和への歩みが、そのまま表されているように思えます。

私どももまた、「平和の祈り」の如く、愛と慈悲に満ちた

世界の実現に向け、一層努力させて頂くことをお誓いしたいと存じます。

本日の贈呈式を契機として、スタルセット師の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またスタルセット師がご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。